マレーシアの美術教育とその背景について
—中等美術教育における視覚美術教育を中心にして—

Art in Malaysian School Education and Its Socio-historical Context:
With special reference to the subject of visual art in secondary school art

山口大学 福 田 隆 眞

Ⅰ はじめに

筆者は既にシンガポールとマレーシアの美術教育について報告をしてきた。[1] それはこれらの国々が多民族社会であり、自国の伝統や文化の継承と西欧文化の影響の間で美術文化の継承と創造、美術教育の整備を進めていることが、わが国の美術教育を考える上で参考になると想定しているからである。また、わが国の美術教育の内容にアジアの美術文化に触れる機会が必要であり、その意味も含めて、一連の研究を進めてきた。

また、東南アジア諸国をはじめ、アジアの国々、地域は経済発展、西欧諸国の文化の影響、教育改革の遂行、情報教育の整備など社会と教育を取り巻く要因が多様であり、教育内容の改訂も急速に行なわれている。そうした状況を継続的に調査研究することによって、美術教育の内容的改訂と社会的要因との関連性を推察することが可能であると考えられる。

マレーシアの中等教育における美術教育に関して、教育課程と教育内容についてすでに述べてきた。[2] 本稿は前回の報告を継続した研究であるが、この間に教育課程が改訂された経緯がある。マレーシアは2000年に教育課程を改訂し2002年には各教科の指導要領に相当する学習指導指針も交付された。そこで、本稿は前回の報告に引き続いて中等教育の美術教育を対象にしてその内容を検証する。2000年の改訂では、教科名の変更がなされた。従来は「美術教育」(Pendidikan Seni) であったが、この改訂で「視覚美術教育」(Pendidikan Seni Visual) [3] と変更された。本稿は視覚美術教育と教科名が変更された現在のマレーシアの中等美術教育の内容を、教育課程、指導指針、参考書籍題材例を資料として述べ、この改訂に関わる社会的、歴史的背景についての考察を試みる。

なお「視覚美術」には従来のように、純粋美術、伝統的工芸、視覚伝達デザインの内容を含んでおり、「美術」と同じ意味であると考えられるが、本稿では改訂の趣旨として「視覚」という言葉を付加したので、そのことを重視し、以下には視覚美術として使用する。

Ⅱ 2000年の中等美術教育課程の改訂

マレーシアでは、2000年に教育省から、初等教育とともに中等教育の教育課程が公布された。[4] 前回の公布は1988年であるから、12年を経た社会的状況の変化による改訂がなされた。そして教科名に「視覚」を付けることで、視覚的な社会環境の変化による美術教育の役割の変化を示唆している。

マレーシアでは現在も公式には美術教育の教科書は刊行されていないが、これに準ずる参考書籍が市販されている。そして、それらの参考書籍の編集には、教育課程 (Sukatan Pelajaran Kurikulum Bersepadu) と指導指針 (Huraian Sukatan Pelajaran) が基礎となっている。マレーシアでは大学進学のための全国一斉テストが実施されているため、市販の参考書はすべて教育課程と指導指針に基づいて編集されている。

新しい教育課程は、基本的には従来の考え方を踏襲しているが、全体的により系統的であり、尚且つ創造性を重視する傾向にある。

マレーシアの中等教育の視覚美術教育の目標は「マレーシアの個々の時代の視覚文化を築くために、高い審美観と想像力、批評、創造、革新性などの基準をもつことである。教育課程の内容は生徒が神への畏敬の念を高め、自然美と祖国の美術と文化遺産を評価し、国の教育哲学の理想に沿って、生徒自身、家族、社会、国家に支援することである」としている。[5] 前回の内容と大きな相違はなく、より明確に教育の目的を定めている。

次に、中等教育の美術教育の目的として、以下を記している。[6]

① 神の創造世界の美を評価する。
② 視覚美術の作品制作において文化研究を培う。
③ 生活における経験と実践によって視覚美術の知識、創造力、発明、訓練、技能を高める。
④ 質の高い工芸品や美術作品を創造するために、様々な技能、メディア、技術を使用する。
⑤ 視覚美術の作品について、記述、分析、解釈、評価を行う。
⑥ 科学、技術、他の科目の学習も加えて評価を行なう。

⑦ マレーシアと外国の視覚美術の歴史的発展のなかで芸術家の貢献と開拓を評価する。
⑧ 職業の観点から視覚美術を創造する。
⑨ 自然と生活における芸術的雰囲気を実現し価値を認める。
⑩ 民族国家の形成のために芸術的真実を打ち立てる。

全体的には国家の教育哲学に基づいているので、国教のイスラム教や民族国家を強調するような表現も見られる。美術教育の具体的内容については別の指導指針で示しており、ここでは教育課程の基本的な考え方を示している。

教育課程の組織と内容については、従前の「造形美術の基礎」「デザインの方法」「理解と評価」の３つから、今回の改訂では２つの領域に分けられた。一つは「視覚美術作品の制作」であり、もう一つは、「視覚美術の歴史と鑑賞」の領域である。教育内容については、この改訂においても明確に定めており、ナショナル・カリキュラムの様相を一層強くしている。

作品制作の領域は次の内容で構成されている。[7]

a）造形美術の基礎
　造形要素：線、形体、形態、空間、材質感、色彩
　造形原理：調和、強調、均衡、対比、リズムと運動、多様性と統一
b）純粋美術：描画、絵画、彫刻、版画
c）視覚伝達：グラフィックデザイン、マルチメディア
d）立体デザイン：工業デザイン、環境デザイン

制作の領域では、造形美術の基礎において様々な美術表現を対象として、研究的な意味内容を含めた造形要素と造形原理の学習が設定されている。

また、視覚美術の歴史と鑑賞の領域では次の内容となっている。[8]

a）マレーシアにおける視覚美術の発展
　純粋美術：美術運動、画家、評価と貢献
　伝統工芸：名人、評価と貢献
b）道具：武器と家事の道具
c）玩具：独楽、凧、伝統的な楽器
d）建築：住宅、イスラム教会、アーチ、食堂と客室
e）輸送機材：陸、海、空
f）衣装：バジュクロン、バジュムラユなどの民族衣装
g）装飾：頭、首、手、足、腰につける装飾

こうした内容によって、生徒は地域の視覚美術、マレーシア国内の視覚美術そしてアセアン地域の視覚美術の相違について理解することを促している。

Ⅲ　2002年交付の美術教育の内容

マレーシア教育省の教育課程開発センター（Pusat Perkembangan Kurikulum）は2000年の教育課程の内容を受けて、2002年に教育課程の解説文書である「指導指針」を公布した。統一カリキュラムにおける学習指導要領の解説のような位置づけである。[9] この章では中等美術教育の具体的内容と指導指針について述べる。

1　第１学年の目標と指導指針の概要

第１学年の目標は次のように示されている。[10]

① 造形美術の基礎において造形要素と造形原理のすべての面を理解する。
② 自然や人工の素材でつくられた作品において、造形要素の観察と応用を通して知覚を発達させる。
③ 様々なメディア、材料、視覚美術の技法を通して、批評や創造のような視覚的概念を発達させる。
④ それぞれの分野において視覚美術作品のもつ目的を達成する。
⑤ 学習過程を整理して記録する。
⑥ 質の高い視覚美術作品を制作する。
⑦ 祖国の美術遺産に対して誇りをもつとともに外国の美術作品の価値を認める。
⑧ 自然とその資源への尊敬の念を培う。

こうした目標を達成するために指導指針として細かい内容を示している。[11] それは、学習分野、学習成果、学習活動への提案の３つの項目からなり、具体的題材の紹介もなされている。１学年は作品制作の領域と視覚美術の歴史と鑑賞の領域からなり、以下のようになっている。

作品制作の領域は以下の５分野からなっている。

1．1　造形美術の基礎

a　造形要素―線、形体、形態、材質感、空間、色彩
b　造形原理―調和、対比、強調、均衡、リズムと運動、多様性、統一感

学習成果としては、造形要素と造形原理を使いこなすことをあげている。題材例としては、模倣、描画、絵画、コラージュ、ポートフォリオ、鑑賞などがある。

1．2　純粋美術

ここでは前述のように、描画、絵画、彫刻、版画を分野としてあげており、それぞれの分野での主題のアイデア、メッセージと材料、用具の使い方を学習成果に設定している。学習活動への提案も細かく提示されており、例えば、描画では、材料に鉛筆、色鉛筆、ペン、インク、木炭、クレヨン、パステル、コンピューターをあげ、技法としては自由な線、ジグザグの線などのように、具体的に指示して

いる。他の分野においても同様に、細かく具体例をあげて説明をしている。

1．3　視覚伝達

ここではグラフィックデザインを分野とし、学習成果では、造形美術の基礎を使いこなすことと材料用具の使用を設定している。題材例としてはタイポグラフィー、ポスター、マークのデザインがある。

1．4　立体デザイン

工業デザイン、室内装飾、景観デザインをあげているが、これらの分野は、4・5学年で学習することを指示している。

1．5　伝統工芸

この分野では、陶芸とアニャマンが取り上げられている。どちらもマレーシアでは身近に存在する工芸品である。学習成果ではこれらの分野の工芸の技術と知識を身につけることを設定している。そして、学習活動の例としては、材料、用具、技法の習得だけではなく、美的な基準や鑑賞も奨励している。

次に、視覚美術の歴史と鑑賞の領域では、作品制作の領域と同じ分野の題材において、その歴史と鑑賞の学習を設定している。著名な画家や名工が紹介されマレーシアの代表的な芸術家を知ることを促している。また、学習活動としては、情報の調査収集、情報の記録、討論、ポートフォリオ作成、訪問、実演などの方法を提案している。

2　第2学年の目標と指導指針の概要

第2学年においても第1学年と同様に2つの領域から構成され、全体の目標と各領域での学習内容が示されている。

第2学年の目標は次のように示されている。[12)]

① 視覚美術作品の制作を通じて造形美術の基礎的理解を深める。
② 様々な材料と技法を使って純粋美術の作品をつくる能力を高める。
③ 視覚美術作品の制作過程に役に立つ現代の技術を使用する。
④ 批評的な思考技術と問題解決のための創造力を使って視覚伝達での創造力を高める。
⑤ 視覚美術の学習過程において責任感を高める。
⑥ 自然とともに視覚美術作品に対する鑑賞力を培う。
⑦ 質の高い視覚美術作品を制作する。
⑧ 視覚美術の学習過程の実践において自信と自己訓練を植えつける。
⑨ 人間の生活における視覚美術の役割について価値を認める。

次にこれらの目標を達成するために、作品制作の領域と美術史と鑑賞の領域の学習内容を以下のように提示している。[13)]

作品制作の分野は第1学年と同様で、1．1 造形美術の基礎、1．2 純粋美術、1．3 視覚伝達、1．4立体デザイン、1．5 伝統工芸の5分野がある。造形美術の基礎の分野は造形要素と造形原理の学習であり、学習活動の提示としては、主題や内容、アイデアの創出、アイデアの活用をあげている。学習内容は第1学年と基本的には同じであるが、材料が増えたり技法が複雑になったりという易しいものから複雑なものへの系統性がある。例えば、絵画の分野では材料として、水彩絵の具、ポスターカラー、パステル、複合材料があり、技法も、ぼかしや垂らし込み、ドライブラシ、厚塗りなどがある。

視覚伝達の分野ではグラフィックデザインがあり、コミック、イラストレーション、アニメーションが題材例としてあげられている。用具・材料においても細かく指示され、鉛筆、色鉛筆、ペン、テクニカルペン、ローラーペン、水彩絵の具、ポスターカラー、インク、木炭、クレヨン、パステル、テンペラ、複合材料、コンピューターがあげられている。そしてコンピューターを使用して、バランス、レイアウト、パース、タイポグラフィー、平面性の学習を促している。さらに絵画での人物画のグラフィックデザインへの応用についてもあげている。

立体デザインは第4・5学年の学習としている。伝統工芸の分野では、木彫と刺繍がある。ここでも材料、技法が細かく説明され、鑑賞と地域の工芸センターの見学も学習活動として奨励されている。

美術史と鑑賞の領域では、純粋美術と伝統工芸をあげ、マレーシアの純粋美術と伝統工芸とイスラム美術、西洋美術との相違比較を学習成果としている。伝統工芸では木彫と刺繍を取り上げ、作品制作の領域との関連をもたせている。

3　第3学年の目標と指導指針の概要

第3学年においても同様の構成で目標と指導指針が示されている。目標は次のように示されている。[14)]

① 視覚美術作品の様々な制作技術において知識と技能を発達させる。
② 様々な道具、媒体、技法を用いた視覚美術の作品制作において、造形要素と造形原理を使いこなす能力を高める。
③ 地域と国の視覚美術の活動において、技術の役割を理解する。
④ 視覚美術のすべての分野における制作の技術的な発展について記録する。

⑤ 視覚美術の学習過程を遂行するための適切な道具、材料、技法を使いこなす。
⑥ 科学や技術のような他の側面から視覚美術の付加価値を確実にする。
⑦ マレーシアの視覚美術文化と他国の視覚美術文化の相違を確実にする。
⑧ 秩序や敬意に対する心情をもたらす体験をする。

次に指導指針が第２学年と同様に示されている。[15] 作品制作領域での造形美術の基礎では、それまでに学習した造形要素と造形原理を作品制作に活用することを強調している。また、純粋美術と視覚伝達との関連と相違を学習成果にあげている。視覚伝達の分野では、シンボルマーク、ロゴ、宣伝デザイン、パンフレット、パッケージデザイン、カリグラフィーを題材例としている。立体デザインは第４・５学年の学習としている。伝統工芸では、バティックと織物がある。

美術史と鑑賞の領域では、純粋美術、バティックと織物工芸、道具、玩具、オーナメントがあげられている。織物は西洋のものと比較している。武器や楽器、日用品も美術史と鑑賞の対象としている。

４　第４・５学年の目標と指導指針の概要

この学年は日本では高等学校１・２学年に相当する。ここにおいても作品制作と美術史と鑑賞の２つの領域で学習を行なう。

第４・５学年の目標は次のように示されている。[16]

① 質の高い作品制作のために造形美術の基礎における経験や知識や技能を使いこなす。
② 美術作品を作ることで視覚的なコミュニケーションを行なう。
③ 視覚美術作品の制作過程において文化研究の態度を培う。
④ 質の高い工芸や生産デザインの製品をデザインするために、様々な技能、媒体、技法、技術を使いこなす。
⑤ 神の創造物と自然資源における美を評価する。
⑥ 日常生活においてもたらされる視覚美術において、知識、創造力、工夫や訓練、技能を高める。
⑦ 科学や技術のような他の側面から視覚美術の付加価値を確実にする。
⑧ 視覚美術の作品に対して愛好心をもち、分析したり、解釈したり、価値付けたりする。
⑨ 視覚美術を日常生活の面から見る。
⑩ マレーシアと外国の視覚美術の発展の歴史の流れの中で視覚美術の名人の表現と足跡を評価する。
⑪ 視覚美術教育の学習において情報技術を使用する。
⑫ マレーシアの国の建設のために芸術的真実を打ち立てる。

次に指導指針の内容であるが、基本的に第３学年と同様の分野の学習であり、学習成果が高度になり、学習活動に多様性がもたらされる。[17]

作品制作の領域の、造形美術の基礎、純粋美術においては材料や技法が増えてくるが、内容的には第３学年と同様である。視覚伝達の分野では、グラフィックデザインに加えてマルチメディアの分野が追加される。特にコンピューターを活用したデザインの内容が強調されているが、その基礎には従来のように手描きとしてのデザインの学習が重視されている。題材例としては、コーポレートアイデンティティ、出版のためのデザイン、カリグラフィー、タイポグラフィーがある。

この学年から実施される分野では、立体デザインがある。具体的には工業デザインと環境デザインの内容である。工業デザインの内容においては、問題解決学習を学習の成果としている。問題の確定→調査研究→制作過程→評価のプロセスを採っている。題材としては家具、調度品、自動車をあげている。

環境デザインの内容では、２つの題材があり、室内装飾と景観デザインである。室内装飾ではその機能、空間、採光、空調、配置、家具、色彩計画、装飾などの知識と原理の理解を学習成果として設定している。景観デザインでは景観、環境の要素として土地、植物、ロケーション、水流、相互関係をあげている。実際の題材として平面上にスケッチと図を描き、立体模型を制作し、作品の結果の予想を行なう。

伝統工芸の分野は、陶芸、アニャマン、木彫、刺繍、バティック、織物がある。決められた材料、道具、技法を使ってこれらの作品制作を行う。

美術史と鑑賞の領域では、マレーシアの視覚美術の発展として、美術団体や組織、輸送機器、建築、民族衣装を取り上げている。この学年では全体的に研究的な内容を含んだ題材と方法が多く採られている。

Ⅳ　新しい参考書籍の題材について

新しい教育課程と指導指針に基づいた美術教育の参考書籍が、2003年から民間によって数種類、順次刊行されている。ここでは日本の中学校に相当する第１学年から第３学年までの書籍を２種類取り上げ、題材における教育課程の具体的反映について述べる。以下に、各学年の題材を記す。

１　Kunci Masteri Pendidikan Seni Visualの題材[18]

第１学年：①線、②形体、③形態、④材質感、⑤空間、⑥

色彩、⑦調和、⑧対比、⑨強調、⑩均衡、⑪リズムと運動、⑫多様性、⑬統一感、⑭描画、⑮絵画、⑯彫刻、⑰版画、⑱グラフィックデザイン、⑲陶芸、⑳アニャマン。

第２学年：①造形要素、②デザインの原理、③デザインの構造、④描画、⑤絵画、⑥彫刻、⑦版画、⑧コミック、⑨イラストレーション、⑩アニメーション、⑪木彫、⑫刺繍、⑬独立後のマレーシアの美術史、⑭伝統工芸の鑑賞－木彫と刺繍。

第３学年:①造形美術の基礎、②描画、③絵画、④彫刻、⑤版画、⑥シンボルマーク、⑦ロゴマーク、⑧宣伝デザイン、⑨パンフレット、⑩パッケージデザイン、⑪カリグラフィー、⑫バティック、⑬織物、⑭独立後のマレーシア美術史、⑮伝統工芸の鑑賞Ⅰ－バティックと織物、⑯伝統工芸の鑑賞Ⅱ－武器、道具、玩具、装飾。

この参考書籍は指導指針の内容を忠実に反映した題材の構成となっている。第１学年では、造形要素と造形原理が細かく分かれて題材として取り上げられ、全体の７割を占め、残りに純粋美術、視覚伝達デザイン、伝統工芸がある。第２学年では、造形要素と造形原理がまとめられて少なくなり、純粋美術、視覚伝達デザイン、伝統工芸に加えて美術史と鑑賞があげられている。第３学年では、視覚伝達デザインの題材が増え、伝統工芸の鑑賞も教育課程に示された内容となっている。

2　Panorama Teks Pendidikan Seni Visualの題材[19)]

第１学年：①線、②色彩、③材質感、④形体、⑤形態、⑥空間、⑦調和、⑧強調、⑨均衡、⑩対比、⑪リズムと運動、⑫多様性、⑬統一感、⑭描画、⑮絵画、⑯版画、⑰彫刻、⑱ポスター、⑲パッケージデザイン、⑳陶芸、㉑アニャマン、㉒マレーシアの美術作家。

第２学年：①線、②色彩、③材質感、④形体、⑤形態、⑥空間、⑦調和、⑧強調　⑨均衡、⑩対比、⑪運動　⑫多様性、⑬統一感、⑭描画、⑯絵画。

第３学年：①製本、②描画、③絵画、④ポスター、⑤コラージュ、モンタージュ、アッサンブラージュ、⑦カリグラフィー、⑧アニャマン、⑨陶芸、⑩版画、⑪パッケージデザイン、⑫コミック、⑬木彫、⑭彫刻、⑮織物、⑯イラストレーション。

この参考書籍は造形要素と造形原理を重視している。第１学年と第２学年では造形要素と造形原理の題材が７割以上を占めている。そして２学年にわたって同じ題材を学習するようになっている。それぞれの内容は系統性をもっている。例えば､線の題材の１学年と２学年の内容を見ると、第１学年では、線の紹介、物理的な線、様々な線、線の表情、線の技法、線と表現効果、線と美術の要素の関係、線とシンボル、線と模様、となっている。容易な解説で参考作品や図示を行なっている。第２学年の線の題材では、線についての知識、線の重要性、立体感を表す線の描き方、材質感に適する線、運動を表現する線の役割、の項目に分かれて、参考作品を提示して解説している。これら２学年の内容を見ると、造形要素の取り扱いは、絵画、視覚伝達デザイン、立体デザイン、彫刻、版画、工芸などの様々な表現分野を対象としている。この学習を美術教育の基礎として位置づけている。特に第２学年では題材のほとんどが造形要素と造形原理に費やされている。これらは単にデザインの基礎と捉えるのではなく、幅広いすべての表現分野を対象として学習するような内容となっている。

以上、２つの出版社から刊行されている参考書籍の内容を見ると、第３学年までの学習で教育課程に示された内容の多くをを習得するようになっている。特にKunci Masteri Pendidikan Seni Visualの方は指導指針に沿った内容構成をしている。Panorama Teks Pendidikan Seni Visualでは造形要素と造形原理を重視して系統的学習を強調した題材構成となっている。

ここにあげられている参考書籍と教育課程との相違と考えられる点は、指導指針では部分的にコンピューターの活用を提案しているが、どちらの参考書籍にもコンピューターの使用をまだ具体的には記述していないことであろう。

Ⅴ　改訂の特徴と背景

前章までにマレーシアの新しい教育課程と中等美術教育の教育課程と指導内容について述べ、具体的に参考書籍に見られる題材について記した。ここでは美術教育の内容の改訂にいたる社会的、歴史的な背景との関連を述べる。

改訂によっていくつかの特徴があげられる。１つは、視覚伝達デザインの学習が増加したことである。２つ目は従来からの継承で、伝統的美術、工芸、文化遺産などの教材を美術史と鑑賞によって学習する内容が強調されたことである。いわゆる国民文化やナショナルアイデンティティの確立を目指すものである。そして３つ目は、学習内容が作品制作の領域と美術史と鑑賞の領域に分けられ、より系統的に学習することが促されたことである。

第１の視覚伝達デザインの重視として考えられる背景として、経済成長があげられる。前回の教育課程の改訂の1988年以降、1991―1995年の第６次マレーシア計画期間において、経済の高度成長が始まり、実質経済成長率は8.7%となり、その後も2000年には8.9%、2001年の経済危機を

乗り越えて、2005年は5.3%と経済成長を続けている。[20] このことにより個人所得も増加し、1998年の一人当たりＧＮＰが3093ドルから2005年には5017ドルとなった。こうした経済成長に関連して情報化社会が進展し、映像としての情報やコンピューターによる美術表現の機会が増大している。このことは視覚伝達デザインの必要性も増加しているといえる。

また、情報化社会への基盤整備が進められており、マルチメディアスーパーコリドーと呼ばれる情報・通信技術産業を国際競争力を備えた一大産業に育てることが計画されて、マルチメディア社会の実現を目指している。このことは2001年の第3次長期計画及び第８次マレーシア計画において「労働集約型から知的集約型の知識基盤経済への移行」として謳われている。この計画により、情報通信技術の活用、人材の育成、情報インフラの整備が進められている。[21] つまり経済成長による産業の発達と情報化社会の建設に伴い、美術教育の内容に視覚伝達デザインの内容が重視されてきたと考えられる。また、従前からの造形要素と造形原理の重視も、視覚伝達デザインへの寄与ということで密接な関係が認められる。

次に国民文化とナショナルアイデンティティの確立を目指す方向が強調されたことが特徴の一つにあげられる。マレーシア国内の伝統的美術や工芸を作品制作の領域においても学習し、また、美術史と鑑賞の領域でも知的理解や教養教育としても学習をするように改訂された。多民族国家では国民文化の概念や確立が教育に直接的に関係している。シンガポールにおいても同様な状況にある。シンガポールでは中国文化、マレー文化、インド文化の３つの文化を融合し、シンガポール独自の文化の創造を目指している。マレーシアはシンガポールと民族構成は類似しているが、ブミプトラ政策[22] による歴史的経緯があり、またイスラム教が国教であることからもシンガポールのような方法ではなく、マレー文化による同化政策による国民統合を行なっている。

このことは美術教育においては、美術史と鑑賞の領域でマレーシアの美術文化を中心としながらも、高学年になればアセアン諸国、西洋美術も学習の対象に含めて、自国と他国、文化の相違点を理解し鑑賞することを促している。

マレーシアの中等教育は美術教育だけでなく、その教育政策に特徴がある。竹熊尚夫はその性格について、国民教育制度の整備・拡充、国民統合ための中等教育政策、国家的な社会経済発展のための政策を指摘している。[23] そして民族的な因子と教育政策について次のように述べている。「実際には中等教育政策は民族的視点から見ると、マレー語やマレー文化面における同化政策を伴う国民統合や、ブミプトラへの経済的援助による経済バランスの確立といった表面的な面に重点が置かれていた。しかし、現在では中等教育段階のマス化に伴って、適性や能力の重視および、人格や規律といった内面的な統合のための教育へと次第に移行しつつあると言えよう。」[24] 実際に、現在のマレーシアでの美術文化の状況では、ブミプトラ政策は残っているようにも見えるが、現在活躍している多くの美術家が欧米での留学経験をもって帰国後、国内で活躍をしている。民族も多様で、美術表現も多様化している。このことは内面的な統合のための教育の成果とも考えられる。[25]

このように、現代社会における美術活動ではマレー文化優先ということは少なくなっているが、中等教育段階においては、価値観の確立した美術作品や伝統的工芸を対象として、美術史と鑑賞の学習対象としている。現代の多様化している美術文化の中で、敢えて自国の文化を系統的に取り扱っているのである。これは多くのアジア諸国が抱えている、西欧文化と自国の伝統文化との関係での葛藤や揺らぎの現象の一つである。

次に学習内容と方法については、従来からの系統的な教育内容と方法を継承しているが、従来までの細部まで指示されていた指導指針ではなく、教育方法に融通性がもたらされた指針となってきた。例えば、前回の教育課程の指導方法では、1990年の指導書には細部にわたり細かな活動の指示が記されている。[26]参考作品や図も指導書に掲載され、技法も図示されている。それに対して2002年のものは指導指針であり、参考図版等は参考書籍などの活用によって融通性をもたせている。このことは前述のように、マレーシアの経済成長により教育環境の整備がなされ、教員養成も進んできたことにもよると考えられる。また、教科書に準ずる参考書籍の種類も増えて内容の充実がなされたことや、情報機器の利用などの美術教育の環境が整えられてきたことも影響している。

以上のように、マレーシアの新しい教育課程とその特徴について述べ、本稿の結論とした。アジアの多くの地域や国々では、西欧文化と自国の伝統文化との関係性に問題を含んでいる状況が見られる。特にデザインの分野では、インターナショナルスタイルが日常を席巻していることから、伝統文化との関連を明確にする要求も出現してきている。バウハウスが生み出した造形要素や視覚言語による美術教育のなかに、デザインの普遍性だけでなく地域や国々の伝統や個性を持った内容を採りいれることが、国民文化の教育としての美術教育の貢献の一つとなると考えられる。

注

1）平成７・８年度文部省科学研究費補助金による「シンガポール、インドネシアにおける美術・工芸教育の調査及びカリキュラム研究」、平成10・11・12年度文部科学省科学研究費補助金による「東南アジアにおける美術教育カリキュラム基礎調査研究―マレーシア、シンガポール、インドネシアの事例―」によってシンガポール、マレーシアの近年の美術教育の内容と実地調査を行なってきた。

2）拙稿 「マレーシアの中等美術教育の教材について」 大学美術教育学会誌第36号　2004年

3）1998年のマレーシア教育省カリキュラム開発センターでのZaidi Abdul Hamid（教育課程副部長）によると2000年以降、美術教育は「視覚美術教育」に教科名の変更をすると述べていた。

4）Pusat Perkembangan Kurikulum Kementerian Pendidikan Malaysia, "Sukatan Pelajaran Kurikulum Bersepadu Sekolah Menengah" 2000であり、わが国の学習指導要領に相当する。

5）前掲４　p2

6）前掲４　pp.2-3

7）前掲４　p5

8）前掲４　p6

9）Kementerian Pendidikan Malaysia, "Kurikulum Bersepadu Sekolah Menengah Huraian Sukatan Pelajaran Pndidikan Seni Visual" Pusat Perkembangan Kurikulum Kementerian Pendidikan Malaysia, 2002　この資料は教育課程を詳しく解説したものであり、わが国での学習指導要領の解説に相当すると考えられる。本稿では「指導指針」とした。

10）前掲９　p1

11）前掲９　pp.2-9

12）前掲９　p10

13）前掲９　pp.11-18

14）前掲９　p19

15）前掲９　pp.20-27

16）前掲９　p28

17）前掲９　pp.29-42

18）Kathleen Chee, "Kunci Masteri Pendidikan Seni Visual Tingkatan 1", Penerbitan Pelangi Sdn.Bhd. 2003
Kathleen Chee, "Kunci Masteri Pendidikan Seni Visual Tingkatan 2", Penerbitan Pelangi Sdn.Bhd. 2004
Kathleen Chee, "Kunci Masteri Pendidikan Seni Visual Tingkatan 3", Penerbitan Pelangi Sdn.Bhd. 2005

19）Mat Aris Saudi, Raja Baharudin Raja Husain, Syed Rukaidar Syed Isa Al-Idroes, "Panorama Teks Pendidikan Seni Visual Tingatan 1", Pan Asia Publications Sdn. Bhd. 2006
Mat Aris Saudi, Raja Baharudin Raja Husain, Syed Rukaidar Syed Isa Al-Idroes, "Panorama Teks Pendidikan Seni Visual Tingatan 2", Pan Asia Publications Sdn. Bhd. 2006
Mat Aris Saudi, Raja Baharudin Raja Husain, Syed Rukaidar Syed Isa Al-Idroes, "Panorama Teks Pendidikan Seni Visual Tingatan 3", Pan Asia Publications Sdn. Bhd. 2006

20）マレーシア日本人商工会議所調査委員会、「マレーシアハンドブック2006」、マレーシア日本人商工会議所、2006、P55及び外務省資料「マレーシア」 http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/malaysia/data.html

21）前掲20、「マレーシア」

22）ブミプトラ（bumiputra 原住民、土地っ子）は1969年５月13日の人種暴動によってマレー人優遇措置として採られた政策であり、農業生産向上への優遇、マレー人の商工業参入などが優遇されている。大学進学、奨学金交付においてもその影響が見られる。（アジアネットワーク、「マレーシア現代情報事典」、星雲社、1998、p38 参照）

23）竹熊尚夫 「マレーシアの民族教育制度研究」 九州大学出版会　1998　p34

24）前掲23　p34

25）一つの例として、国立美術館が出版した現代マレーシアの代表作の図録では、77名の美術家が収録されており、そのうち42名がイギリス、アメリカ、フランス、中国、台湾、オーストラリア、日本などで美術教育を受けている。
（National Art Gallery, "Masterpieces from the National Art Gallery of Malaysia" 2002）

26）Kementerian Pendidikan Malaysia, "Kurikulum Bersepadu Sekolah Menengah Buku Panduan Guru Pendidikan Seni Tingkatan Ⅱ" 1990

参考文献

・㈶自治体国際化協会 「マレーシアの教育」CLAIR REPORT NUMBER 217、財団法人自治体国際化協会シンガポール事務所、2001

・諏訪哲郎・斎藤利彦、「加速化するアジアの教育改革」、東方書店、2005

Art in Malaysian School Education and Its Socio-historical Context:
With special reference to the subject of visual art in secondary school art

FUKUDA Takamasa

Yamaguchi University

This paper is a follow-up of my previous paper, "Teaching materials for Art in Secondary Education in Malaysia." The Ministry of Education of Malaysia revised its 1988 curriculum in 2000 and published the new course of study for art in the form of the national curriculum in 2002.

The subject name for art was changed from "Pendidikan Seni" [Art Education] to "Pendidikan Seni Visual" [Visual Art Education]. This paper summarizes the influence of the curriculum revision on secondary school art and analyzes socio-historical context of the revision.

Based on the analysis, the paper suggests the following as the features of the revision.

1 Social context in the age of ICT encourages the subject contents related to visual communication.

2 Due to the increasing emphasis on national and state identity, teaching materials of traditional art and cultural heritage are regarded as contents for knowledge acquisition and liberal arts education.

3 The revised curriculum divided the contents of secondary school art into 'practical creative work' and 'history and appreciation of art' and emphasized a systematic learning method.

Art in Japanese school education, which is moving away from a systematic learning, can learn a lot from the above features. At the same time, the revised curriculum of Malaysia itself will make an important document to learn about the trend of art education in Asia.